

Title	社会学史関係資料：塾員(故)尾関一夫氏よりの聴取り資料
Sub Title	Materials on the History of Sociology in Modern Japan -Mr. Kazuo Ozeki's Lecture-
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1991
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.64, No.2 (1991. 2) ,p.77- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19910228-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学史関係資料

— 塾員（故）尾関一夫氏よりの聴取り資料 —

川 合 隆 男

一、はじめに

ここに社会学史関係資料として掲載をお許しただいたのは、一九二四年（大正十三年）三月に慶應義塾大学文学部（哲学科C・社会学専攻）を卒業なされた塾員（故）尾関一夫氏よりの聴取り資料にもとづくものである。¹⁾一九七八年十二月二日に、丁度おれわれが続けていた地域生活研究会の会合にいらしていただいて尾関さんに小講演をお願いしたときのものである。わたしの手元にある記録によれば、この小講演の後の翌年には、「月島調査」に参画した（故）三好豊太郎先生にやはり小講演をお願いしたと記してあるから、いまとなつてはいずれも大変に貴重な資料であると共に、お忙しいなかをわれわれのために懇切にお

話して下さったことに心より感謝し憶いを新たにす次第である。

尾関一夫氏は、塾文学部哲学科で社会学を専攻した高橋丈夫、熊谷義一、山本碩の諸氏と共に、関東大震災の翌年、大正十三年三月に卒業なされている。ここに収録した聴取り資料は大正八年に塾に入学した当時の大学・学生生活からやがて就職、内務省の役人としての生活が、卓抜した記憶力を示しながらいきいきと所懐されて語られている。そこには、公的な記録資料や編纂史料等にはみられない、やはりひとり人間の人間がその時その時に直面し、感じ、歩み、刻み込んだ姿があり所懐がある。大学部から大学令によって大学となった当時の学生の自主的な勉強態度にも目を見張るものがある。近代日本における新たな社会情勢を迎えて、当時の社会学も講壇社会学といえども現実生

活、現実社会、社会問題や社会事業、経験的な社会学へも関心を強めつつあったという動きも示されている。日本の社会学界全体の動きについてみれば、学会活動としては「日本社会学院」に代って、新たに全国的な学会組織として「社会学会」が設立された当時であった(大正十三年設立。塾の社会学はこの当時は主任教授が田中一貞(一八七二—一九二二)であったが、この先生は尾関氏の在学中に急逝し(大正十年九月没)、その後福益三、若宮卯之助(大正十年九月より社会学を担当)らに引き継がれる。この間に、尾関氏らの塾生が文学部長に交渉して「白虹を買けり」の記事で言論弾圧によって『大阪朝日』を退社したあとに雑誌『我等』などで活躍していた当時の在野のジャーナリスト、社会批評家、社会学者、長谷川如是閑を塾の教壇に迎えようとしていたという話は特筆すべきであろう。事実、『現代国家批判』(一九二二年)、『現代社会批判』(一九二三年)を著わし、ユニークに社会学論を展開していた社会学者としての長谷川如是閑については近代日本社会学史上再考察していく必要がある。

労資協調会に就職すべく、一時的な腰かけのつもりで仮に職を得た内務省社会課の仕事が、そのまま尾関氏の生涯の職業経歴と人生の大半を占め、重大な影響を及ぼしていった様子も淡々と語られている。新しい社会問題・社会気運を反映して官庁等に新設された「社会局」「社会課」において人事の採用にあたって、当時社会学を専攻していた学生が採用され、職場でも

比較的のびのびと研究や調査がおこなわれていた様子もうかがわれる。「社会学」と「社会主義」とが結びつけられて、「社会学」がむしろ弾圧されてきたという話だけが尾を引いて伝えられてきたことに照らせば、「社会学」の別の動きにも眼を向けるべきであろう。東京府の社会課を振り出しに、島根県庁、千葉県庁と転動し、乳幼児調査・不良少年保護・児童保護・失業救済事業・生活救護・軍事救護等とかかわって苦闘した様子も語られている。

われわれの先輩塾員の足跡を通して、大正後半期から戦中期、終戦に至る時代状況の動きを再び確めるひとつの資料として位置づけることも可能であるし、近代日本の社会学史を再考察する一資料としても活用していきたいと考える。

(一) 尾関一夫氏が卒業した大正十三年三月の文学部卒業生は二六名であった。

文学科 A (八名)

井上英哉、大村武雄、大沢貞橋、河口真一、藤井春吉、北村小松、塩川秀次郎、神保 武

文学科 B (四名)

竹内繁雄、辻 悦淳、安達勝弥、鈴木重正

文学科 C (三名)

西脇得三郎、浦上大次、山根正吉

文学科 D (一名)

武藤金太

哲学科 A (一名)

高橋文雄

哲学科B (一名)

西谷謙堂

哲学科C (四名)

尾関一夫、高橋丈夫、熊谷義一、山本 碩

史学科 (四名)

飯田茂登夫、友松円譚、吉田小五郎、山口 昌

(慶應義塾総覧) (昭和四年)、一〇一頁)

(2) 三好豊太郎先生のこのときの講演(一九七九年九月)は先生ご

自身がそれをもとに論文「月島調査の成立とその経過について」(『明星大学研究紀要—人文学部—』一六号、一九八〇年)としてまとめられており、またこのときのテープをもとに起した「月島調査について」が三好先生の著『草創期における社会事業の研究』、明石書店、一九八九年、第四篇に収められている。この著には、他に第一篇・不良少年に関する調査、第二篇・不良児童と職業との関係、第三篇・少年と社会関係の異常性、も収録されている。

二、塾員(故) 尾関一夫氏よりの聴取り資料

「私は大正八年に塾に入りました。ちょうどその年は、皆さんも御承知かと思いますが新大学令というのが、文部省令ですかね、出まして、一応、私立大学のある程度のもは全部ではありませんが、今の六大学が、まあ東大を除きまして、六大学が結局、その時に大学になったんです。その前は慶應は、大学といっています。大学部といっていました。普通部、

大学部といっていましたから。あとは、早稲田とか、法政、明治、中央、日本なんていうのは大学といっていましたけれども、これは結局、専門学校でしてね。まあ、一応、名前は大学と言っていましたけれど、本当は専門学校だったと思うんですよ。それで、ようやく、大正八年だったと思うんですが、大学令で大学になりまして、大学の水準もあがったわけですよ(註・大学令の公布そのものは大正七年十二月であったが、これに基づいて、慶應義塾大学となり、文学・経済学・法学・医学の四学部として予科三年・学部三年(医学部四年)とし、大学院をも付設したのは大正九年四月からであった。帝国大学令というのがその前にありまして、それはもう廃止になりました、結局、今の東大や他の京都にしても何にしても、皆、一応、私立大学と同じレベルになった訳ですね。それで結局、大正八年に入りまして、その当時も、やっぱり慶應は入学試験がありましたよ。昔から。私は入学試験がない学校は困ると思いましたが他の大学では、中学を出た奴は、無試験の所もありました。それが入学試験がありましたね。私共は何人受けましたかね。入試の発表を見に行きましたら、九十三人が四人、我々の仲間は引つ掛けていました。それでまあ結局入った訳ですが、その当時は大学予科三年、本科三年、医学部は四年制度。旧制高等学校と同じですよ。三年間やってね、それから本科、専門科とある訳です。今、私は毎日三田へお邪魔してはいますが、学生諸君が、大変に子どもっぽいのを見てですね、僕らの時もそうだったかしらと思っただけですが、でも、

もっともつと我々の時はね、みんな大人っぽかったですよ。ええ。もう既に、私共、中学時代に、親爺なんかと一緒に歩くのは嫌でしたし、ましてや母親なんかと一緒に歩くなんてことは、てれくさくて、どうにも嫌でしたけれどもね。今の学生は大学の入試にまでお母さんがついて来たりして、幼稚園じゃあるまいしという気がしますけどもね。それから一つにはですね、僕らは数え年で、もつとはっきりいいますと、我々の時に一緒に来た奴は、大体小学校を六年やりましてね。高等科というのがありましたよ。小学校の高等科を二年やりまして、それから中学に入って、中学を五年やってきますからね、比較的、年が、そうですね、今の学生諸君よりは一つか二つ上ではなかったでしょうかね。九十何人入った中には、中学からストリートで来たというのや浪人したというのもありましたし。それから、私の仲のいいある奴は、一人は、美術学校へ行っていましたけれど、今の芸大ですね。あそこの洋画科か日本画科へ行っていましたけど、おもしろくないといって、やめて、塾へ来て、試験を受けて入ったという奴がいました。もう一人は田村和平という仲のいい奴がいました。これは京都の三高にいたんですが、親爺さんがロンドンの支店長に赴任してしまつて、家は東京にあって、京都の寮にいたと思うんです。これが、寮にいてもつまらんし、親爺がいないし、東京の家から通いたいということで、試験を受けてやつて来ました。だから、年も一つか二つ上になつてしまふんですね。今の学生諸君は、赤いセーターなん

か着てきますけれど、我々の時は、みんな、こんな変な帽子を被つてましてね。三高から来た奴はね、昔は、白線が三本入つてましたけれど、その白線を三本とつてそれから桜の徽章をはずして、ペンの徽章をつけてきたんですよ。仲の良い奴でしたかね。それから、もう一つですね。つまらない話ですが、もうちょっと聞いて下さい。これは、すぐにはわからなかったんですが、やっぱり僕らと一緒に、年はちょっと上だと思つていましたが、講義を聴いている奴がいました。彼は、講義が済むと、六百ページの原書を出して読んでいますわ。それで、僕らは、中学から毛のはえた学生だったから、『ほう、すごい難しい本を読んでいるなあ。わかるかなあ。』と思つて見ていました。それが、ちゃんと読んでいるんですね。質問してもね、大学習科の一年の時ですがね、えらい難しい質問をするんですね。はあ、こりゃあ、変わった男だなあと思つていたんですね。それから、私は芝の浜松町に住んでいましたから、田町に電車を通つたり、あるいは、当時は市電とありましたね。市電で乗り換えたりして三田へ通っていました。まあ歩いて近づいたんですよ。芝公園の中を抜けて学校へ通つたことがあるんですよ。ある日、偶々、私が学校を終えて帰りに芝公園の中を歩いていきますとね、増上寺の横に、五、六十人の人が集まつて、しーんと話を聞いているんです。それで、私はちょうど、帰りだものですから、急ぐ訳ではないから、何をやってるんだらうと、ちょっと歩いて行つて見ましたらね、その男は衣を着て、

まあ坊さんですから、お説教でしようね。お説教をしていたんです。ちょっと聞いてあまり興味がなかったものですから、すたすた帰って来てしまったんですが。そうしたらですね。あくの日、学校へ来たたら、『尾関君』っていうんです。『何だ。』と言ったら、『君は、昨日、俺が話をしていたら、ちょっと立ち聞きをしていたのと違うか。』と言うんで、『うん、ちょっと帰りに聞いていたが、べつに長く聞いていたわけではないよ。』と言うと、『ああいうことはね、僕は話し辛くて困るから、もう今後ああいうことがあっても決して俺の話は聞いてくれるな。』というんですね。そんなことがありましたが、それが、やがて、あなた方御存知でしょうか、友松円諦ともまつ えんたという男ですわ。御承知ですか？ これは、戦前でしたか、戦争中だったか『仏教講義』というのをラジオでやっていましたね。半年か一年。それで、日本中をうならせた男なんです。後で、はあ、予科の時から、そういう話をするに励んでいたのかなあと思いましたが、そういう男ですよ。

友松円諦。今でも、せがれが、塾を出たのが、神田で幼稚園を経営しておりますよ。友松円諦。円はまるいに、諦はゴンベンに、帝国の帝。その人はね、宗教大学、今の大正大学を卒業しまして、昔は軍隊がありましたから、軍隊にとられました。一年志願兵をやりまして。昔は、百八円、金を納めめすと、軍隊は現役は、一年で済んだんですよ。それで一年で軍曹くらいになるんですよ。それから勤務演習か何かで半年縛られて、見

習い士官をやって、少尉に任官するんですよ。彼はそれも済ませまして入って来たと思えますから、もう、少なくとも二十五か六じゃなかったかと思うんですが。そういうのが入って来ましたよ。そんな事で、割合に年を喰ったのがおりました。満年で数えると、というか、数え年と普通数え年では同じことです。身体的には同じことですけれども、受ける感じは私は十八歳ですというのと、私は二十歳ですというのとでは違うでしょう。だから、そういう事もあって、いやに親爺ぶっていたと思いますけれども。しかし、今の学生諸君よりは、何だか年寄りが多かった気がします。そんな訳で、とにかく九十何人が引っ掛かりました入ったんですが、そういう特別な奴が多かったですね。先生はといいますと、まあ、あなた方も先生なのでしようが、どんな先生だったかと、ちょっと申し上げますと、よくも我々に、あんな立派な先生方が教えてくれたと思えますがね。いの一番に、頭に思い浮かんで来るのは、野口さんです。野口米次郎先生という先生がおられました。これは、大変な英語の権威者として、オックスフォードやケンブリッジで講義したり、インドの大学で講義をしたりしていた人ですが、その人が僕らみたいな大してできもしない奴を一年間教えてくれたんですよ。英語を教えました。その人のせがれがね。今そこにある言語文化研究所の下に、国際センターの横に、部屋がありますね。あの部屋を設計したり、それからあの建物の前の植込みの中に変な石が建っているでしょう。あれを設計した野口イサ

ムであります。あれの親爺さんなんですわ。それからね、あんまり興味がなければいいかもしれませんがちょっと聞いて下さい。戸川秋骨さんという先生がいました。これはね、時々、今でも新聞に出ています。評論家の戸川エマさんという方がいます。その人のお父さんです。その人にも、一年か二年教わりました。それから漢文だったか、大変偉い先生がいました。内田周平さんといましてね。後で私は先生一人と私一人で、支那哲学の講義を一年間、聴いたのですが、その先生は、大変なお年でしたけれども、非常な学者でした。というのは、あなた方も御存知でしょうけれども、カントの「Kritik der reinen Vernunft」：純粹理性批判、あれをね、日本語で訳した人はたくさんいますよ。けれども漢訳したといえますから相当、大したものだと思っていますね。それで、私は一年間、支那哲学を教わりました。その他に、久保田万太郎さんが国文学を、それから小島政二郎。この人も、今、鎌倉にいますかね。その人に方丈記とか徒然草とか、最後にはもっとややこしいものを習ったんですわ。その他には、外人の先生が四人いたですよ。あなた方も先生だから、まあ聞いて下さい。その四人の内、二人が印象に残っています。一人はね、ウィードといいましたか、もちろんアメリカ人ですけれども、教室を出るともう日本語はべらべらなんです。ところが、教室に入ると、それは、英語を教えるんですから、それでいいんですけれど、一言も日本語は言わないんですよ。今でも、六十年も前のことで、覚えてるのはで

すね、サフランという薬草があるでしょう。御承知ですか？ それをお風呂に入れて、女の人が風呂に入るとききれいになるとかいうそのサフランが、たまたま出て来たんですよ。本の中にね、それを日本語で言えば、一分かからないで、皆、ああそうだとわかるでしょうけれど、英語で説明するものですかね、五分かかって、のみこめなかったということがありましたよ。そういう概念をやっていました。厳しい奴でした。これは。その次に、もう一人ね、コンルイという先生がいました。これは、英国の飛行将校だったと聞いています。飛行機事故で足を痛めて軍人をやめまして、その後、勉強したんでしょうね、日本へ来ましてね。昔築地に海軍大学というのがありましたが、そこと慶應とにやってきました。もちろん日本語は、全然わかりません。それに教わりました。けれども、私は、今でもあの先生は、そう言っている悪いけれども、大した先生じゃないなと思っています。というのはね、もちろん、何か本は使ったやっと思えますけれど、くだらない事ばかり、教えてくれたんですよ。たとえば、大正九年頃にはエーワンとかチェイドなどという言葉はなかったですわ。そんなスラングばかり教えてですね、それから、もっとおもしろいのは、ロシアの帝政時代に皇室にもぐり込んだダスプーチンという怪僧がおりましたよ。その話を何回も何回も続けてやってくれて、これはおもしろかったですよ。そういう先生がおりまして、奴さん、芝公園に住んでいました、私は芝公園を通って時々、学校へ来るもんです

から、よく一緒になるんですね。学校まで一緒に歩いてくる途中、いろいろな話をしましたが、後で聞いたら、それはスパイだったそうです。それで、私共を教えたそのあくる年、もう一年教えまして、どんどん落第させるものですから、英国へ帰ってしまった、帰ってから、ロンドンから、本を出したんですよ。

“Menace of Japan”といますから、『日本の脅威』といたすか、そんな本を出したんです。それで、あれはスパイだったかも知れないあと思いましたが、そのような先生がおりましたね、しかし、まあ、愉快でしたよ。そうしてどうやらこうやら、予科一年が終わりまして予科二年も終わったんですが、予科一年から二年になる時には、九十何人の内、二年に上った奴は、二十五、六人しかいなかったんですよ。あと七十人位は、みんな一年遅れちゃったんですよ。それは、私、今でもそう思うんですが、遅れたのは、えらいできが悪くてという事ではなくて、試験を受けたのかどうかと思えますね。それくらい呑気な奴がおりました。我々の時は、。だけど一年ストップした連中でも、私の仲の良かった、美術学校から来たという男は、名前を言いました。蔵原しんじろうという名前、御承知かどうか知れませんが、これは児童文学の大家になりました。大体、心理でしたけれども。それから、他には青柳瑞穂という人も慶應で先生をやっておりました。御承知かどうか。これは、フランス語でしたけれども、これも、その遅れた連中ですね。あとは、国立や官立の外語へ行くとか、大阪の外語にみんな行

きましてどの位行ったか知れませんが、だから我々は二十五人だけ進級しましてね。それで予科二年にまいりまして、いよいよ専門課程の本科に入ったわけですよ。私共は二十五人いて、社会学へは四人行きました。四人の奴が社会学をやるとういう気になったのは、その当時は、私がまちがっているかも知れませんが、社会学というのは、他のサイエンスに比べて、充分わかっていなかったんです。私自身も。社会学というのは、いったい何を勉強するんだらうか、社会学とはこういうものだという定義も、はっきりなかったのではないかと思えますね。あつたかも知れませんが、もちろん外国には学者はいましたから、あつたかも知れませんが、よくわかりませんが、ただ新しい学問だから、ちょっとおもしろそうだから、ソロバンはじいて金もうけをするのも嫌だし、法律をやつて、それで飯を食うのも大変だから、人のあまり勉強しないことを勉強してみたらおもしろいだらうということで、社会学へ入ったわけです。そうして、その当時の主任教授は、田中一貞さんという方で、我はどんな講義が聴けるかと胸をふくらませて、喜んで行ったんですが、ところが、学期が始まりました、いっこうにその先生は講義に出てくれない。何でも、病気で、休講だと聞いたわけです。それではまあ、その内に直るだらうから聴けるだらうと思っていたんですが、他の講義で結構しばられていましたしね、ところがいっこうに、その先生は夏休みになつても、とうとうお出にならなかつたんです。夏休みが済んだら、今度は

講義が聞けるだろうと思つたところ、相変わらずお出にならな
いんです。学校も、そうほおっておく訳には行きませんから、
かわりの先生として、シカゴ大学で Ph. D. をとつた福谷益三
という先生をたてました。フクタニとよむか、フクヤとよむか、
益三は益の三と書きますが、その先生がこんな本をもつて来ま
してね、"Psychology—in its psychological aspects" という本
です。そして講義をしたんです。講義をしたっていったって、
僕は読んで来てわからない所があつたら聞けというのですか
ら、一生懸命に貧弱な地下室で読んだものですわ。四百頁ぐら
いありましたか、それで一年間終わってしまったんです。そう
して終に、自分で聴きたいという講義を聴かずに、一年終わっ
てしまいました。今の学生諸君は、教授もバリッとしているし、
ほんとうに幸せですよ。僕らの時は、そんなことでした。それ
から選択課目に仲々おもしろいのがありましてね。市政論と法
制史というのを選んだんです。その市政論というのは、講師と
なつて来るべき管の人が、朝鮮総督府の政務総監となつて赴任
してしまい、結局先生は来ない。これもまた、全然講義が聴け
ないんですね。それで結局、仕方がなく、他の奴で欧州近世経
済史。阿部秀助さんの。すばらしい名講義をする先生で、経済
学部で先生でしたが、その講義を聴いたりね、それから滝本誠
一さんの日本経済史や、何か交通政策も聴きましたね。今の増
井さんの親爺さん(増井幸雄)ではないですかね。それから、二
年生の時に、小泉信三さんの社会問題研究を経済の三年の連中

と一緒に、講義を聴きました。これは、おもしろかったですね。
今でも覚えていますが。社会学の研究ですから、そういうえば皆
さん、すぐにわかるでしょうけれども、socialism ですからね、
マルクスやサンディカリズム、ギルド・ソシアリズム、フェビ
アン・ソサイヤティ、もう一つ、A・コントの講壇社会思想、
そういうつた講義を一年間聴きましたよ。それからボルシェビ
ムとかね。経済全部と私共四人一緒ですから、三百人ぐらいい
ましたか、もちろんノートはとりませんし、聴きっぱなしです
よ。だけでも、試験問題は一応、その先生の講義を聴いていれ
ば必ず書けるという問題を出して来ました。ですから、私共は、
文学部の社会学で経済の知識はないのだけれども、試験を受け
ても、結構やれましたよ。一年間、聴きましたけれども。そう
して本科の一年が終わりまして、二年になつても三年になつて
も先生が来ないので困るということで、私共は文学部長の所
へ行きますよ、どうも一年間、福谷先生の変な本を読んで終わ
ってしまったのだけれども何とか、先生のしっかりした講義を
聴きたいから、何とかしてほしい。それで、私共が考えたのは、
長谷川如是閑という人がいましたが、御承知でしょう。あの人
を是非、先生によんでほしいと頼んだんです。そうしたら、ひ
とつ交渉してみましようということになりました。文学部長が
ね。それで、今に決まるかなあ、今に決まるかなあ等待着って
いた所が依然として決まらないんです。どうも交渉が駄目だった
というんですね。結局、また我々が聴こうという講義がやっぱ

り聴けないんです。それで、今、お話ししました福谷という教授が、今度はハーバードの先生でカーバーという人の“Sociology and Social Progress”という本をもってきたんです。その本に書いてありました。“Handbook for a student of Sociology”と。ですから、社会学の学生の為のハンドブックだったんですね。それが八百ページ位あります。今でも持っていますけれど、それをまた自分でやるんですよ。社会学はね。それで終に、その講義はその年もその本を読んだだけですよ。それとエルウッドの本。エルウッドというのはミズリー大学のやつぱりSociologyの先生でして、その二冊を読んだんです。こんなことではしようがないではないかと、我々は四人で考えましてね、これで卒業したんだといって卒業になるのか、何とかできないかということで、何といたしますかね、講義を聴けない代わりに、他の本を買って読んだんです。たとえば、ニューヨーク州のコロンビア大学の社会学の先生でギディングズという人がおりますが、その“The Principles of Sociology”という本があります。そのような本を買ってきて、丸善からとって、貸りてみました。それからバウムリーという先生の“Poverty and Social Progress”という本がありまして、これは大学の先生ではないのだけれども、その本の権威者だったらしいが、分かったのか分かりにくかったのか、とにかく一生懸命読みました。その他には、高田保馬という先生がいました。これは九州大学でしたか、京都でしたか、その人の本を読んだりね。それから京都大

学の河上（肇）さんの本、あれはずいぶん読みましたよ。名文でね。そうして、いよいよ三年になりました。まあ、一年、二年、三年とそうやかましくいうことはないんですけれども、三年間に、あるだけの課目をとればよいのですから。しかし一応三年になりまして、今度は、先生が、やつぱりやって来ましたよ。それは、若宮卯之助さんという教授でした。」

（三年におなりになった時ですか。）

「ええ三年。それで一年間、講義を聴きましたが、何せ、学生は四人ですから。さあ、どういう講義をしたのか、たいがいふつうは覚えてはいるんですが、この先生の講義の内容はほとんど覚えていないんですわ。私が、不勉強だったということもありましょうけれど。それで、一緒に出た奴に、飯を食い会をやって、毎月一べんずつ、銀座で会っていますからね、その山本（山本碩、大正十三年三月卒業という奴にきいたんですよ。『若宮』という先生が、講義をしたんだけれども、何を喋ったんだか、俺は全然覚えていないんだよ。』ってね。そうしたら、奴さん曰く、『うん、俺もあんまり覚えていないけれどもね、今から五十年も前の社会学の先生でね、こういうことを言った先生だから覚えておけ。』っていう訳ですよ。それはね、日本には、失業状態がないということを使ったそうすわ。まあ、今から言ったら、おかしな話ですけれども。というのは、都会から出て来て、工場労働者をやっている、不景気になってクビを切られたら、田舎に帰って農村で働けば、失業状態はないといったそ

うですよ。そういうことを言っていて、大学の先生がとまっていたんですから、今から考えるとおかしいでしょうと思うけれど、そういうことで、その講義を聴きました。それで、やっぱり、福谷という先生は、相変わらず、カーバーの本の残りの半分をやったわけですが、そういう社会学科を出たわけですよ。だからね、今の学生だったら、おそらく文学部長を教室に引っ張ってきて、毎話めにしちゃって、いじめたでしょうけれども、我々の時は、そんなことは決してしなかったし、一人や二人の学生の為に教授を頼むのでは、慶應も大変だったろうとあきらめていましたけれどもね。その代わり、卒業して、「何だ、あいつ慶應を出たけれども何にも知らないじゃないか。話にならん。」では、はずかしいですからね、それで、私共は自分でやっただですよ。まあ当然でしょう。大学の学生ですから、自分でやることは。自分でそういう本を買ってきて、かじりました。いろんな本を読んで、とにかく一応、卒業したんですわ。それで、卒業論文の話になりますが、それは後で、仕事に関係しますから申しあげますけれど、四人の内二人は知りませんが、一人は『売淫の社会経済学的価値』という題の論文を書いたんです。それが、今生きている山本という奴です。今あなた方いうとおかしいかも知れませんが、昔は公娼制度というのがあったでしょう。吉原とか、新宿とか、品川とかありますね。その友達は、そんなに遊んだかどうか知れませんが、ずいぶん吉原の警視庁の病院を借りていろいろな研究をして、立

派な論文を書いたらしいんです。というのは、若宮教授が大変にほめましたから、結構、やっただですよ。それは卒業しまして、東芝に勤めましたけれどもね。私は、その時に不良少年と云うのがありましたけれども、今は非行少年といいますが、それがね、今から考えると大したことはないんだけど、大分、問題になっていましたからね、それを約一年以上かかって、いろいろ調べました。どういう家庭から出るとか、知能がどんな程度だとか、それから、どういような矯正の方法をとったらいいかなどということ調べて、卒業にしました。大正十二年の夏休みに、信州の温泉にこもって、随分書き上げて、それで二十五日に東京に帰って来て、九月だったか十月だったか、それを出して思っていたところ、関東大震災になりましたね、私の家も燃えてしまったんです。燃えないと思っていたから出さなかったんですが、燃えると思っていたら、出しましたけれど、そういうわけで二百何十枚か焼きましてね。それから、手元に本もノートもないし、何にもなくて、図書館の本も随分貸した本を焼きましたから、それで、間に合わせに、卒業する為に書いたんです。それは、今考えても、お恥ずかしいものだと思うんですが、殆ど記憶を辿って書いたにとどまっていますし、ちゃんとしたデータも入っていませんし、いろいろな参考になるものも殆どないわけですから。それでまあ一応、卒業することになったのです。だから書いたと言いましたが、その程度で、あなた方と比べたらお話しにならないだろうと思いま

すけれど、何とか卒業しましてね。何せ、もう裸で何にもないんすから。ちょっと、余分な話になりますけど、英国から、今の天皇の先生になって来たのがいました。パニスと言って、英国の文部省が推薦してよこして来た先生で、それに我々は教わったんですよ。それで、そいつの為に落っこちてしまったら大変ですから、皆、やっぱり卒業したいんですから、我々は何とかしてということ、デモをやりましてね。初めて。それで、二十五人の学生が全部勢揃いしまして、奴さんの家に行っただす。それで、英語の先生ですから英語でやったのでは、癪にさわるから、フランス語でやってやろうということで、仏文科に非常に話せる奴がいたんです。今でも生きています。時々、会いますがね。それでね、『君、ひとつフランス語でやれよ。僕らは後ろについているから。』ということ、日曜日に行っただすよ。そうしたら、やっぱり、外人っていうのは、ひじょうに丁寧に扱ってくれました。二十何人行って、それから話したんですよ。『我々は、大震災にあつて、殆どが家を焼かれてしまつて何にもないんだから、あなたが大変難しい試験をやつて、我々をもう一年落としてしまったら、非常にみんな困るんですよ。試験は必ず受けます。受ける代わりに、だいたい書けるような試験問題を出してくれませんか。』というような事を、フランス語でやったわけです。ええ。驚いていましたよ。そうしたら、その先生がね、それで『ウィ・ムッシュユ』といったかどうか知れませんが、ともかく試験に出してくれまして、一応何

とか書きましたよ。書いて、出して、卒業しました。それで、まあ世の中に出たわけですけれども、一つ思い出して申し上げておきたいのは、慶應の入学試験の問題の事です。私達の時の試験問題をいいますと、これは六十年たつても、覚えていまずよ。英文・仏文・独文の和訳とね、和文の英訳・仏訳ですわ。私はもちろん、英語で受けました。ただ、英語の問題は、試験問題の大きな紙にね、ずーっと長い文章で、労働問題なんか書いてありましたすね。それが出ました。変なイデオロギカルの、変なひねくれた文句で、アンダーラインを引いて、これを訳せなんていうものよりも、読解力を試すには、一番あの方がいいと思うんですよ。まあ、よその学校は、みんなイデオロギカルの変なものを書いて、アンダーラインを引いてこれを訳せという意地の悪いひねくれたようなものを出してしましたけれどもね、本当に英語の読解力、英語に限らず、仏語、独語にしてもそうですけれども、読解力を試すにはああいふ長い文章が一番です。単語が一つ二つわからないにしても、ずうっと読んでいくと、前後の関係で何とかなりますからね、それで結局、その方が一番いいと思うんですよ。それから、国語と漢文の試験の代わりに、作文を書かされたんです。これは、国語の古典ですとか、現代国語ですとか、いろいろなものがありますけれども、それもまた傍線を引つ張つて、へんちくりんなものを出すよりも、やっぱり作文を書かせるといいです。ある程度、国語の力がないと書けませんね。それから、漢文も、

白文といえますか、それに送りがなを書いて出したり、返り点や送りがなをつけて読ませて、解釈させるよりも、やっぱり作文を書かせると、漢文の力がある奴は、文章がうまいですよ。本当にすっかりした文章を書くには、今はそういっても通らないかも知れませんが、私共の時には、国語の力も必要だったし、それから漢文の力のない奴は、りっぱな文章は書けませんでした。それから、和文の英訳で一つおもしろい話をしましょう。今でも覚えていますが、『八十歳を越えた老人に長寿の秘訣を聞いたらば、その老人は、どんな柔らかいものでも、百べん噛めといいました』と、ありました。私は今、八十になりましたね。もうじきなんですわ。僕は百べんも噛まないけれども、当時は人生五十年といいましたから、その頃は八十といえば、大変な年寄りだなあと思っただけで、今、私は八十に手が届きそうになりました、そうすると私も随分長生きをしたなあと考えていますが、そんな問題が出たんです。だから、慶應の入学試験の問題というのはね、今はどうだか知りませんが、なかなかおつない問題を出したと思っっていますよ。そういうことがありましたよ。まあ、これはつけ足しておきます。そうして、卒業しまして、仕事に入りますが、私は、だいたいは、労働問題も大部かじっていましたし、社会学なんかは、ろくに勉強できなかったけれども、それで、今の中労委、昔は、財団法人労資協調会といっていました。労働者と資本家の協調会です。そこ就職するつもりで売り込みに行きましたよ、自分

でね。そして、第一部長に、総務部長は添田(敬一郎)さんという人で、永井亨さんという人が第一部長をしておりましたが、会いに行つて、まあ履歴書を持って行きました。是非、こういう仕事をしたいと言いましたね。ところが、私は卒論が、不良児の問題を研究しましたから、労資協調会あたりのそういう問題とは関係ないんだけれどもそういう仕事をしたいと言つたら、そうしたらですね、たまたま震災のあとで、その団体が財政的にも、そんなに余裕がなかったんではないかと思いますが、まあはつきりしませんが、結局、『あなた、しばらく待っておらんか。役人をやつて。その間に、こちらでも考えますわ。』と来るんですね。私は、役人というのはどうもね。慶應を出た人で役人というのは少ないし……。まあ、それでもしばらくそうやっているとやるものですか、それでは、どうせその内、協調会で採用するだろうから、役人をやつてやろうかと考えまして。昔は、そんな呑気なものでしたよ。それで、私は内務省に行きました。内務省の社会局に行きました、そうしたら、それでは、東京府へ行けというんです。そのころは、東京府といいました。今の東京都はね。東京府と東京市とに分かれていきましたが、その東京府へ行きましたね。知事の次に、内務長というのが、昔はいたんですよ。福永□□といまして。それから、私は履歴書を出しましたが、『あなたは、社会学をやったか。』というんです。やったかといわれますと、そんな訳で卒業したんですから、内心は恥ずかしいんですが、まあ一応、

社会学をかじりましたと言いますと、それでは、今、社会課の人間を呼ぶから、ちょっと待っていなさいということだね。それで、内務長の横に座っていましたらね、電話して、東京府の社会課の者が来たんです。そして、書類を見て、私に、社会課長に会えというんですよ。社会課長というのは今も付き合っていて、僕より年配の人ですが、その人に会えというんです。それでその社会課長のところに行きましてね。それは、神尾（かずはる）という人ですが、そう言っていました。そうして、いろいろ話しましてね。それではここですぐ決めるという訳にはいきませんから、のちほどお宅に通知しましょうという事で、そのまま、帰って来ました。そんな事でしたよ、昔は、就職というのは、今は、もう神話でしょう。しかし、役人をやるならばね、法律科の人も、政治科の人もいらっしゃるかも知れませんが高文を通して本筋でいかなければ、うそなんです。社会学をとったからといって、そんなもの仕方がないんですけども、しかし、おもしろいことにね、その当時は、大正デモクラシーの華やかなりし頃でね、内務省で、社会局なんというのが出来たり、各府県に皆、社会課というものが出来たんです。社会学と社会課とは関係ないんですよ。ただ、社会という字はつきますけれどもね。世の中、そんなようなものでした。だから、こいつ、社会学を出たから、社会課にいいなあというようなもので、それで専門官として入ったんですよ。何とか、ものすごく楽といったら楽だね。出勤簿はないしね。朝行つて、楽に行つ

て、社会課の研究なんかをして勤めましてね、結局しばらくしたら、採用の通知が来たんです。のこ／＼いきました。だけど、その時でも、おれは、いずれ協会で労使問題をやるんだから、こんなものはいいやと思っていましたから、すごく不真面目でね一年間に二十日間、役人には休暇があるんですけれども、入つて早速、二十日、休暇をとっちゃつて、温泉に遊びに行きましてよ。それから役所に帰つて来ても、誰も何とも言わんですなあ。やあお帰りとか言つて、それから、まあ少し仕事をやりませんが、それでは、どういう仕事をやったかといひますとね。私はたまたま不良児とか非行少年のことを研究していたんだけど、まず第一番目にやったのは、非常にその当時は多産でしたよ。今はもう皆さん、子供を二人位しか生まないからどうか知れませんが、昔はね。私が、仕事をしたのは、もっと下層階級の、という大変失礼ない方ですけども、貧民窟なんかが多いですわ。その当時は、そういうところで仕事をしましたが、非常に子供が多くて、乳児死亡率が、うんと高いんですよ。日本は。東京はもちろんだけれども、全般的に、非常に日本は高かったんです。だから、何とかして乳児の死亡率を少しでも減らすことをしようではないかということ、私は考えました。それで、私より古い奴がいまして、その男にそんな話をして、それでは早速やるぞということになりました。それで、目の日本女子大に社会事業学部というのがあったんですが、そこを卒業した連中を十人ばかり、東京府の囑託にしまして、児

童保護の指導をしようということになった訳です。乳幼児法です。まあ、一種の啓蒙運動ですね。それで、今と違いました、そういう所に住んでいる人は、まあ全般的にそうでしたが、育児なんというのに対しての知識は、皆無なんです。ですから、飛び火なんかのおできみたいなものが、いっぱいできているし、顔色だってよくないし、そういう所に限って、子供が多いんですね。というのは、いろいろな家庭が、そう楽でもないし、趣味とかもあまりないし、だから結局、いきおい子供が出来ちゃうんでは、ないですか。僕は、そうだと思うんですよ。もう非常に子供が多くて、六、七人というのがざらにあったんですから。それで、何とかして、啓蒙運動をやったということ、東大の医学部の若い医者二人、囑託にしまして健康相談に出てもらったんです。それで、私は、日本女子大を出た社会事業学部の連中をつれてですね。

……大島というのが、島の大島でなくて、今でもあるでしょう。今の江東区ですか。あそこに工場がいっぱいありまして、その辺を対象にしまして、毎週毎週行くんですわ。行って一軒一軒入りまして、調査をするんです。カードをちゃんと作っておきまして、家族関係とかその他いろいろな、まあ収入だけは失礼ですから聞きませんでしたが、あとは全部、その関係を調べましてね、今は手元にありませんけれど、いろいろな項目をカードを使って調べたんです。そうすると、まあ、こんなにちと入ると、大体、妻君がいますね。最初は保険屋と間違え

られてしまいました、『私は保険は大嫌いですから。』って、けんもほろろですわ。ああそうって引き下がっては仕事にならないですから、毎週毎週、行くんですよ。ある人は、『私は自分の子供を育てているんだから、どうしようとか大きなお世話です。』と言いました、昔のそういう所のお母さんの常識というのはそんなふうでした。それを結局、毎週毎週行って、ようやく、一応『ああ、そうか。東京の奴さんが来て、子どもの健康を心配してくれるんだなあ。』ということが、ようやくわかって来たんでしょかね。それで、その内に、場所を借りて、ちゃんと健康相談所を置いて、そこへ、お母さんが子どもを連れて来るようになりました。そうして医者が、その医者は佐藤といいましたが、もう一人は何といいましたか、千葉大学の教授になりましたが、その人が診て、この子供はどうしたらいいとか、こうしたらいいとかいうような注意をしてくれます。薬はくれませんから、ただ診て指導するだけですわ。それで、それをやり続けて、その当時のお母さんというのは、どの程度であったかということの一つの例として申しあげますとね。その医者が赤ん坊を診て、『いやあ、お母さん、この子は日光浴が少し足りないや。だから、日光浴をさせたら、いいと思うね。』というアドバイスをしたんです。そうしたら、『ああ、そうですか。』と言って、お母さんは、連れて帰って行ったんですよ。そうすると、十五分もすると、又、そのお母さんが子供を連れてやって来たわけですよ。それで、『何をしに来たんだらう。さっき医

者に診てもらって帰ったと思っただが。」と思っっていますとね、すぐさま、その母親は、『先生、先生。』と、赤ん坊を抱いて、医者の前へ行ったんです。それで、『さっき、先生は、日光浴が足りないと言いましたから、今、薬屋へ買いに行きましたが、そういう薬は売っていませんでした。』と言うんですね。医者もね。普通は日光浴と言ったら、薬屋で売っているとは思わないですけれども、そういうような人が、東京には、いっぱいいましたよ。今は、育児雑誌なんかができちゃって、奥さん連中が読んで、^{生半か}な知識を持って、赤ん坊を下向きに寝かせているものだから、ふとんの上で寝かせたりして、窒息してよく死んでいでしょう。そういう悪いことがありますけれども、昔のお母さんというのは、もちろん、そんな知識もないしね。それでも、私は一年間続けました。続けて行って、しまいには、だんだん彼らもわかってきて、子供をいかに、大切に育てなければならぬかということを考えたんですね。それで、死亡率が、どの程度減ったかという事は、ちょっとはつきりしませんが、その当時、そういうものを調べまして、いろいろな統計をとって随分、雑誌に書いた事を覚えています。手元にはありませんけれども、幾分は。まあ、少なくとも、子供は、こうして育てなければならぬんだなあという事を悟った事は、確かだと思います。そういうことをやった訳です。一年やって、一年で卒業して、その後、大島とか王子とかにセツツルメント・ハウスを作りましてね。東京府で。そして、そこへ引き継ぎま

して、ずっと、私が他の仕事に移った後も健康相談をやって、例の乳児の死亡率の低下に努めたと聞いていますが、そういう事でした。それから、いよいよ、今度は、私が卒論を書いた不良少年の問題ですが、近頃は新聞を見ていると、中学生が恨んで刺し殺したとか、中学生が子供を孕んだとか、親爺を殺したとか、すごい記事が出ていますけれど、私共がやっていた頃の不良児なんていうものは、そんな大それたものではなかったですよ。今から考えても、まあそれだけ世の中違ってきますから、かっぱらいをすとかスリをやるという程度のものでした。それで、東京警視庁管轄の警察がいくつありましたか、その警察を皆で手分けして、二つとか三つ受けもって、毎週また、警察へ行くんです。まあ、電話がかかってくるんですけれども、そういう不良児を警察でつかまえると、法律で罰するということわけにはいきませんからね。十七歳を越せば少年法という法律がありまして、法の適用がありますけれども、それまでは感化院というのがありましたし、その後、少年矯護法と名前が変わりまして、そういう法律が出来たんですけれども。まあ一応警察から頼んで来るんですよ。そうすると、出て行きました、警察でその子供を引き取って、池袋に幼少年保護所というのがありました。そこに心理学をやった専門の先生とか、あとは事務員やご飯を炊く女の人もいましたけれど、そこへ一時収容しましてね。その間に知能審査をするんです。王子に滝野川研究所というのがありまして、アメリカの大学で心理学を勉強し

てきた石井亮一さんという先生が、半日かかって、テストをするんですよ。それで、この子供は、とても学校に行っても駄目だとか、それが、どの程度に確かだったかということは今でも疑問をもっていきますけども、そういう指示をしてくれました。それで、その子供を、家庭に返しても駄目になるのは、よその好意をもって人の所に委託してアフターケアをするとか、どうしても悪いものは、少年教院といいますが、昔は感化院といいましたが、そこに収容しましてね、そこで私はまず、どういふ親から出るのだろうかという事、それから環境がどうだということ、知能がどうだというような事をいろいろ調べたんです。大体、言えることは、すこぶる非科学的なんですけれども、大酒飲みの子供には、そういうのが多かったですよ。それからもう一つはね、今、世間には、そういう人はあまりいませんけれども、梅毒、性病をやった人の子どもには、出たんですよ。それから、必ずしも貧乏な人ばかりでなくて、相当な家でもやっぱりそういう子供が生まれて、親が困って相談に来たのが随分ありました。それは、どういふことになるんでしょうかね。ちゃんとしたりっぱな家の息子というのもありましたけれど、結局、親の指導が厳しすぎたのかどうかと思いますが、どうにもこうにも困ったというのがあります、かなりの数を扱いました。それを、いろいろ集計して、何かに発表したことありませんが、そういうことで児童保護の仕事をやりまして、仲々、

難しいものですよ。十七歳を越しますと、これは、もう司法省の管轄になりますから少年院というのがありまして、そこへ不定期刑で、三カ月とか四カ月とか、あるいは一年とか一年半という刑を言い渡して入れるんですよ。よく、時々、新聞に出ていられるでしょう。今でも、集団を組んで先生をいじめつけて飛び出したとか、そういうのがね。それは司法省の、今の法務省の関係で、私どもの管轄ではなかったですが、それが、その子供を扱いました。これは、あなた方にお伺いしたいと思えますけれども、どうしてこんなに悪くなったんでしょうかね。私達の時には、その程度なんです。しかし今の連中と較べたら、殆ど問題にならなかったですわ。今では、ちょっとかっぱらったとかでは刑にならないですが、それがそんなに嫌がられたほどの時代でしたよ。そういうことを、私共が一年か一年半やって卒業して、だんだん仕事が変わって行ったんです。ちょうどその時は、不況でして、毎年十二月になってくると、失業者がうんとふえちゃって、寝る所がないんです。それで、東京府は失業救済事業というものを起しまして、金を集めて、労働紹介をやったわけです。それは、毎朝早く、労働紹介所に行って、仕事や作業を世話してもらって、帰りにまた金をもらって帰ってくるというものでして、夏の内は、まあいいですけども、冬になると寒いでしょう。寝る所がない者がいっぱいいますからね、そういうものを一時的に収容する施設を作ったんです。救世軍へ委託しましてね。これはおもしろい話ですよ。大きな

天馬船といいますが、でかい船を四艘借りまして、それを浅草の吾妻橋という所におきましてね、それに寝床のない労働者を収容するんですよ。朝になると追っ払ってしまわなくていいですよ、そうすると、まあ夕飯が食べますね。おかゆみたいなものを食べたと思うんですが、朝飯も食べました。それで、朝、おっぼり出して、そういう連中は朝早く、労働紹介所に行って、仕事を探すんです。それで仕事にあぶれた連中は、仕方なく晩まで、どこかで暇をつぶして、晩になると、その船をめぐってやってくるわけです。船の中に入ると何百人とはいっていますし、船の上にはほろをかぶせてありますから、ふつうでしたら十二月から歳末にかけてといったら寒いでしょう。これが中に入りますと、汗たらたらですわ。人が多勢入っていましたから。しかしね、救世軍というのは、よくやったと思うんですよ。今でも感心しますがね。中に入りますと、もう臭いし、風呂になんか入らないですから、体が汚ないですし、そういう連中が、もう何百人と一つの部屋に入って、それが四艘。だから少なくとも千人近くはお世話しておりましたね。それで、やっぱり皇室からの金をあずかりました。御下賜金があります、それを基にして、いろいろな金をくっつけて、それでお世話をしたということがありました。」

（それは、時期的には、いつ頃でしょうか。）

「十二月です。」

（いや、その年度は？）

「年度ねえ。そう、昭和の六・七・八年頃じゃないですか。九年から私は、島根県庁へ行っちゃうんですから。そう、昭和六・七・八年頃ですね。大変な仕事でしたよ。ちゃんと食事をさせてね。しかし、今考えてみますと何とかかんとか言っていますけども、そりゃあ、生活はよくなったと思うんです。もっとも、山谷には、今でもそういう所がありますね。それから、その頃、浅沼稻次郎なんていたでしょう。社会党の代議士で、もう亡くなられましたが。その頃は、もちろん代議士ではなかったですよ。それが、そういう職業にあぶれた連中をつれて、役所に来るんです。だーっと。それで、社会課の部屋に入ってきて、これをとりまいて、まあ、乱暴はしなかったですけども、それで、失業者を何とかして救えというんです。社会課は当然、やるべきじゃないかとやってくるんですね。そうすると、仕方ないから、警視庁へ電話しますと、警視庁はトラックですーっと来るんですわ。その連中をトラックに積んで、刑事が引っぱっていくんですが、そうすると、もう深刻な話ですよ。その晩は、警察で夕飯を食わすでしょう。あくる朝も、まあ飯は食えるわけですよ。だけど、悪いことはしていませんから、朝になると、ばあっと追っ払うんです。それがしょっちゅう来ましたよ。ずうっと部屋に入ってきてまして、一銭二銭の頃ですが、パンを与えろというんです。ええ、すごいものでしたよ。しかし、今言ったように、刺したとかいうようなことはなかったです。それが、しょっちゅうありまして、来るともう、すぐトラック

にのせて……。それほど、深刻なことでしたよ。それが、大部続きましたね。不況でしたから。そうして街にあふれた人間や仕事にあふれた人間はそういうことをやっていましたけれども、と根本的な問題としては、非常に生活に困った人が日本中にいっぱい、いたことです。これは、東京ばかりではないですよ。全国的に非常に生活に困る人が多かったですよ。それを何とか救わなければいかんということで、救護法という法律が出来たんです。今は、生活保護法とっているんじゃないでしょうか。私の時は東京府で済生法を作りましたから、法律が出来まして、勅令が出まして、施行令が出まして施行細則が出来ましてね。施行細則も、東京府で作ってやりましたが、それが昭和七年の一月一日でしたか。そうして、法律で救っていくんですけれども、そういいいしても、なかなか法律というのは、かたぶつの所がありません、ほんのちょっとした所でひっかからないのがあるんですよ。そういうのを救う為には、方面委員制度というものを活用したわけですわ。東京市は、府で始める前に、もう市でやっていました。これは、だいたい街の有力者がなっておりまして。もちろん、ボランティアですからね、そして、家庭訪問しまして、生活に困っている人に、何とか生活のメドが立つように職業を世話したり、内職の世話をして、しかしどうしてもできないという人には、法律のない時には、東京府でもっている金を、東京市は東京市の金ですけれども、幾分出したと思えます。ちょうどその時、昭和七年でしたが、私は三十万円ね、

今から考えたら何だという金になりますけれども、知事から、寄付金を三十万円もらってきたんですよ。これは公債でしたが、それで社会課でもっともいいと思う仕事をやらんかということですよ。それで、私は、その時は下っばですから、社会課長と相談しまして、それでは、方面委員制度をとり入れて、役人は数が少なくても、できませんから、そういう民間の人に、暖かい手をのばしてもらって、困った人の保護・指導をしようではないかということになったわけです。それが、いわゆる方面委員制度です。そうして、私は東京市のことは、あまりよく知りませんが、その当時は、まだ東京市は十五区でした。その後、合併したんです。あれは、五十四ヵ町村ありましたか、荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡、南葛飾郡、こういう四郡が東京市をとりまいていたんです。その四郡で五十四ヵ町村、荏原はね、品川から始まって、南葛飾はどこら辺でしたかな、亀有なんか、もちろん入っていました。その五十四ヵ町村に、千人近い方面委員を嘱託にしまして活動してもらいましたが、それには、しっかりしたテキストブックを作りましてね、どういう法令があって、どういうふうに適用していくんだとか、法令に漏れたものには、こういう方法をとるとか、いろいろな問題を印刷したテキストブックを作りまして、教育をして、それでそういう方々が大いに活躍してくれたわけです。まあ、今、私が話をしても、あなた方、ピンと来ないでしょうけれども、三十万円という金は、今だったら三億ぐらいですか、その利子が五分で一

万五千でしよう。その一万五千の金で、五十四ヵ町村の困った人々に奉仕したんです。たった一万五千元。まあ、何錢なんていう単位の頃ですからね。一万五千元でもって、どの位の家庭を救いましたかね。私は、直接、自分でやったわけではないけれども、方面委員が、みんな自分の受け持ちの地区をまわって、この家は何としても、生活費を何とかしなければならぬというのを申請して来ます。そうすると、それぞれの受持を私は覚えていきますから、荏原郡は何々君、豊島郡はだれだれというように、そういう家の書類を集めて後で審査しまして、それで申請するわけですね。生活費を出すようにと。それで、一番多いのは、半月分でしようかね、七円五十錢ですよ。今いうと、おかしくてね、はがき一枚買えないんですが、しかしその頃は、けっこう、それで半月、何とかもったんですよ。一日五十錢ですか。それから、家族が少なければ五円ですよ。もっと少なければ二円五十錢だとか三円だとか、そうして一年間、面倒を見たものですよ。ですから、延べ数にしたら相当な家族の数になったのではないでしようかね。そういうことがありまして、米地さんという町の有力者の一人ですががこの人が、随分よく面倒を見ました。自腹を切ったりして、随分、面倒を見ていましたよ。そうして、やっている内に、それでは足りないというので、さっきいきました今の生活保護法を適用しまして、行き倒れになっっている連中を市町村で引き取って面倒を見るとか、軍隊にとられた人は、軍事救護法という法律がありました。それで一

家の働き手をとられた人は困りますから生活保護をしたりしました。医者にかけたり、お産の時は出産費用を出すとかして、保護をしまして、そんなものでしようかね。その他に、いろいろな法律も多少ありましたが、あまり活用しなかったですね。そうして一応、困った人を救ってきたというのが、東京府の社会課でやった主な仕事です。その他には、住宅組合法というのがありましたね。これは、持家でない人が多いものですから、誰でもマイホームを持てるようにしようという事なのですけれども、今は住宅公団がやっていますが、昔はなかったものから。それで、住宅組合法という法律がありまして、七人以上で、組合を作って、国から資金を借りるんです。非常に安い利率でした。それで年賦償還にして、その家を自分のものにするということなんですけれども、私は全然関係しませんでした。それを社会課でやっていました。あとは、失業救済事業とか、さっき話したように労働紹介とか、そんなことが、大正末期から昭和の初め頃の仕事の主なものではなかったでしようかね。そのうちに、もう満州事変が始まりましたし、大東亜戦争になっちゃって、殆ど、そういう一般の社会事業なんていうものよりも、今度は軍事援護に、全力をあげましたからね。その後、私はクビになるまで、そういう仕事をやったんです。そういうことで、あなた方の研究の足しになるかどうか知りませんが、何のデータもなしに、こんなくだらない漫談になってしまいましたが、そんなことが主な仕事でした。それでね、もっと詳し

い、参考になる話をする人間を近く、紹介しますから。来年になりましたら、多分承諾してくれるだろうと思うんですが、社会事業を専門にやった男なんです。塾の経済を出まして、私が東京府庁にいた時に、そいつは品川の町役場にいましたね。その後、東京市に合併したものですから、東京市の社会局に、おそらく勤務したと思うんです。慶應で社会学博士の学位をとったんですが、御承知ですか。大久保満彦といいます。経済を、昭和五年に出ています。それが、慶應でも、社会事業の講義をしていましたから。それだったら、実際、東京に長く居ましたし。私は、それから、内務省や方々にまわされますからね。島根県庁で、社会課長をやったり、千葉県に行ってやったりして、もう東京のことは殆どわかっています。私は、そこまでやって、東京を離れてしまったわけです。」

（東京を離れられたのは、いつですか。）

「昭和九年。その頃は役所というのは、まあ東京府、地方庁というのね、内務省の役人と地方庁の役人と両方いるんです。それで、東京府に初めから入って、中学でも出て入った人は、大体、東京府の役人ですわ。それから僕らみたいに、さっき話したように、専門官とかいいかげんに入った奴がいて。私の他に、まだね、慶應から、二人来ました。それは、一年あとで、哲学を一番で出た男ですが、それが頼って来まして、東京府へ入りました。もう一人ね、今、商学部の先生になった向井君と、昭和十五年と一緒に出た男がね、社会学を出まして、

東京府へ来まして、社会課と一緒に仕事をしました。それから東大の社会学を出た奴も、二人いました。今は、もう死にました。こいつも、仲のいい奴でしたが、それから一ツ橋を出たのも、いましたね。社会課というのは、ああいう地方庁でも、一番、そういう学卒の多い所ですよ。他はね、そんなもの、おらんです。ほとんど中学を出て、雇いくらいから入って、だんだん上がって行って、判任官ですわ、月給八十五円位かね。まあ八十五円か百円だったのを覚えています。そういう人は、住宅組合なんかやっていましたけれど、いかにも役人らしかったです。僕らの仲間は、そういう学校を出た奴が多いでしょう。それに、そんなに役人らしいことをやらないものですから、半分遊んでいましたね。僕みたいに、入ってすぐ、二十日も休暇をとってしまふ奴もいたんですから。おもしろかったですよ。それから、そういつは何ですけれども、学問のある奴がいましたよ。社会課というのは、新しい課でしょう。だから、さっき話したように、社会というの、何でも社会に結びつけちゃって、割合に、ぱりっとした奴がおりましたよ。だから、社会課というの、おもしろい課でしたね。社会課長だって、同僚ですから、別に遠慮することはありませんし、前に行っちゃって、直立不動の姿勢をとる必要もありませんしね。だからほんとうに、話をしておもしろかったですよ。慶應を出た奴はね、役人なんかやる奴は、実際、ないんですわ。ほんとにないんですよ。私だって、協調会に入る筈が、ちょっと待っている、しばらく

くやっっていないさいというものですから、腰掛けのつもりで行ったんですよ。ところが、だんだんやっていますとね、責任が重くなってくるんですね。おまえ、今度はこれをやれとかあれをやれとか、やって来るでしょう。そうすると、ちゃんと勉強しなければならぬんです。そもそも、心ならずも、役人になっちゃったですわ。それで結局、最後はですね。それから、昭和九年に、私は、島根県庁に行きましたね。高等官なるとかというところで行ったんです。それで、社会課長をやりました。前に警視總監をやったのと一緒にいましたが、私は社会課長を四年やっています、やっぱり東京に来たいですからね。だから、おまえ、どこへ行けというのは、内務省でまわすんですけれども、聞きまして、『私は、もう島根県庁に四年いますから、島根県庁はおもしろいですけれど、もうそろそろ東京に行きたいですわ。』という話をよくしたもんですよ。そうしたらね、『いや、待て。今、欠員があるかなあ。』ということで、東京では、私の下にいた奴が、東京でがんばっているものですから、仲々空かないんです。それで結局、千葉県へまわされたわけです。『千葉県へ勤務命令』と官報に出るんです。千葉県へ来たのは、昭和十三年の七月でしたかね。千葉県庁へ勤務を命ぜられて、又、社会課ということで、社会課長ですわ。あとで軍事援護とかね。しかし、いよいよ最後には、もう県庁はね、戦争が厳しく激しくなってきた、とても県庁で指図していたのでは間に合わないということで、県庁に本店を作ったんですよ。主な所に。そこ

にまわされましたね、そこで知事の卵みたいなことをやったんです。やっぱり経済課とかね、総務・経済・刑事・厚生、そんな課がありましたかね。それで、やっていますましたけれども、おもしろくないんですよね。やっぱり。私は社会事業はおもしろかったけれども。それでも、いっそやめてやろうかなと思っっていました。翼賛会の支部長と兼務になったものですから、そんなことで、とうとうぶざっと。だから、役所は一切出入り差し止めになっちゃって、それでやめて、印刷屋に首をつっこんだんです。そういう事で、とりとめもない、くだらない話をしましたがね、そんなことで私の一生は、殆ど終わったようなものです。まあ、たいへんつまらない話をしましたけれど、もし何か私の知っていることでありましたら……。だけどね。私、やっています、他の課よりも社会課でよかったと思いますね。そうして多少とも、人のお世話を申しあげて、まあ、それがどの程度役に立ったかは知りませんが。だけど戦争になりましたね、課は、まあ、すごかったですよ。これは全然、話が違っています。戦争は千葉県庁にいた時でしたけれども、すごい金を使ったでしょうね。私は、もう、どんどん戦争に出て行きましてね。一家の主人公が葉書一本で行っちゃうんですから。そうして出て行くと同時に、死を覚悟して行くんですから、それで私は、一般の社会事業も大事だけれども、軍人援護に全力をあげて、やってやろうと思っまして、課の奴は七十人位、私の部下にいましたけれど、その時は、それを総動員してほんとに

やりましたね。夜の十二時まで、仕事をしましたよ。その当時は、今と違っています、残業なんて、もちろん何にも出ませんけれど、まあ一応、時代が違うものだからね。陛下の謁覧、ということ、喜ばされちゃって、それで夜の十二時まで仕事をしましたよ、ところが、考えると嘆かわしいことだけれども、戦争もよくないことだが、人間というのは、金というものに対して、これほどまでに気持ちが変わるものかと思うほどでしたね。それはね、これはまあ余談ですから、本当にくだらない話ですが、聞いて下さい。大切な息子とか主人公が戦争に行くでしょう。そうするとね、不幸にして戦死した人がありますと、お金が下がるんですよ。陛下から、宮内庁からも下がるし、それからあとは扶助料の問題があります。そうすると今度は、嫁さんと、その戦死した人の親とが本当にすごい喧嘩になってしまふんです。『この遺骨は俺によこせ』とか、嫁さんは、『いや、私の主人だから、私が。』という具合にね。それは、何かというと、要するに、問題は、わずかな金なんです。金がついているものだから。その調停を、私も部下にやらせましたが、そりゃあ世の中っていうものは、今、皆さんが考えたって、おそろく想像もつかんでしょうけれども、それが一番嫌だったですよ。しかし、私は真剣にやりましたよ。それは、ほんとに。私自身は何も兵事には、関係なかったものだからね。後で兵事の集まりが出来ましたけれども、余人をもって、代え難いということ、私は引っ張られなかったんです。だけど、裁判官とか、

大学の教授とか医者とか、そういう知識階級の人が、みんな引っぱり出されてね、点呼をやるんですよ。竹やりをもってね。町に出したら、大変立派な人が、くだらない伍長か軍曹の号令ひとつで、竹やりをもって、たーっと、校庭に並んでね。それを、私は支団長と一緒に、見ていましたが、何と、耐えられないですよ。戦争って、よくないですよ。それでね私は、それを精一杯やりました。軍事援護は今だったら、相当の金を使ったでしょう。やっぱ、金っていうものは、大事なものですけどもね、生活に困りますから。戦死した人の子供を集めて、靖国神社に参拝させたり、夏は海岸に連れて行って、寮を借りて、そこで海水浴をさせてやったりね。そうして、ありとあらゆることを精一杯、これはもう、私は役人をはずれて、役人の気持を捨てて、やりましたよ。それでも、尚、足りなかったです。それで、一番私の心に残っているのは戦地へ慰問団を出したことです。東京都・千葉県・埼玉県・神奈川県ですか、それが確か第一団の管轄区にあるわけです。それで慰問団を出しましてね。兵隊さんがよろこびますから。しかし、だんだん漫才とか浪花節なんていうのは、飽きが来たんですね。だからもっと地元のおね、たとえば千葉県だったら千葉県の人に来るような何かをして下さいという要望があったんですね。それで私は、ある年に、青年団、女子青年団の連中に行ってもらったんです。十人に、梶原の役人をつけて。その次の年は、芸者を十人。これは希望があったんですけども、是非現地にも慰問

させようということで、芸者を十人頼みまして、張り切って行きましたよ。それが、揚子江の上流の方に行っただんですが、その頃は大部支那に米軍が入りこんでいまして、飛行機は米軍の飛行機が殆どでしたよ。そうして、それは揚子江を下って来まして、慰問を済ませて、九江キウキウっていう所で爆撃にあつて、全員が死んでしまったんです。それを私は、正月の四日か五日に、官舎が休みだから遊んでいましたら、県庁から電話がかかってきたんです。陸軍省の大佐かなんかをやってるのが電話をかけてきましたけれど、『今、県庁に来ていますけれど、ちょっと御足労を願いたい。』というんです。『何ですか。』と言ったら、『いや、おいでいただきましたら、学務長室で待っていますから。』と。それで行きましたら、何と、その十人が戦死したという訳ですよ。爆撃されてね。私は、まさかそうなると思つて派遣したわけではないけれども、要望があつたし、希望者も行きたいという希望だったからやっただけなんですけれども。それで今度は、その家族の家へ行かなければなりませんわ。知事もあわてちゃつて、『済まないけれど、君行つてくれ。』つて言つてね、『それじゃあ、行きましょう。』つて、行きました、話すんですけれども、その時の敷居の高さというものはねえ、今でも覚えていますよ。『こんにちば。』つて入るんですけれど、どういふふうに切り出していいか、そりゃあ、その時は、みんな忠君愛國で燃えていましたから、いいて言えはいいけれども、それにしても、大事な主人公が死んでしまったんだから。これは、団

長で行つた家ですけれども、その奥さんに話すんですが、あの時のつらさっていうのはねえ、今でもまさまじと覚えていますよ。しかし、そうはいっても仕方がないから話すでしょう。実はというわけで、話しましたらね、お母さんが、『だから私は、この度は、やりたくないと思つていました。』つて、こう言うんです。そうしたら、娘が、あの娘は小学校か中学、その時は旧制ですから、小学校だったと思いますが、『お母さん、そういうことは決していうものではありません。せつかく、県庁から見えたのだから、うやうやしく聞いておきなさい。』というんですよ。だけれどもね、そう言つて、娘はたしなめましたけれども、お母さんが、今度はやりたくないと思つた通りですか。出したのは、私が命令して出したんだから、それは何ともいえない気持ちですね。今でも、それを思い出しますと、それは、どうにもなりませんけれど、そういうことがありました。もう再び戦争があつては困りますけれども、その時は、みんなそれで、よく飛行機練習生とかの徴募も私はやりました。中学三年程度の連中ですが、私は試験官になつてね、『どうして、一人息子なのに、兵隊になろうとするのか。死んでしまつたら困るじゃないか。』といったんです。言つたら、その青年がね、『だつて日本が減びたらどうなりますか。』と言うんです。それで、『お母さんは、どうした。』と聞いたら、『母は、今朝、私に赤飯を炊いていました。』と言つていました。それで試験をして、甲種で予科練習生として春日の航空隊に行きましたが、そんな

時代でしたからね、誰も彼もが国の為にと考えていましたね。私もそう思っていましたけれど、だげど考えてみると、いろいろな罪深いことをしたと思いますね。ええ、ほんとにすまないと思っています。だけど、どうしようもないです。私は自分でやった訳ではないんですから。そういうことで、とにかく終わって、結局、クビになって、追放になってしまったですから、それで、まあ印刷屋にとび込んで……。だから、今から考えると、今の世の中は何のканのといえますけれども、そういう生活の面では、非常に向上したんではないでしょうか。ただし、精神的には、私は非常に墮落したと思っています。私が、そういう事をいうと、『何だ、あの野郎。明治何年ながら、そういう事を言ってる。』とお思いになるかも知れませんが、しかし、もう少し、人間が、よくなるなければいけないのではないかと思うんですが、どうですか。そういう点は、私の考えが間違っていますかね。」

付記 われわれの大先輩の塾員尾関一夫氏がわれわれの研究会にいらしてこのお話を下さったのは、一九七八年十二月二日であったから、十年余以上も経過してしまっただ。テープを通して生前の尾関さんの生の声をきくと、大先輩が後輩の未熟な社会学徒のわれわれをしきりと励まし、叱咤しておられるように思えてならない。今回こうした形でテープを起して活字にすることをお許し下さった尾関家の御遺族の方々に深謝する次

第である。また、このときの研究会（地域生活研究会のメンバーとして参加し、同席して下さっていた原田勝弘、佐藤茂子、霜野寿亮、中川清、松井清、水谷史男、田中重好、柄沢行雄、有末賢らの諸氏に感謝したい。更に、テープを起して原稿になおして下さった当時のゼミ学生だった林（旧姓太田）貴子さんにもここに記して感謝する次第である。